**13 荒川洋平『やさしい日本語』**

年代を問わず、外国人と日本語で話すことには、日本人はまださほど習熟していないように思えます。母語である日本語を使えばいいのだから簡単に思えるかもしれませんが、外国語として日本語を話す外国人からは、少なからず不満の声を聞きます。応用言語学の用語を使うと、①日本語母語話者と非母語話者との接触場面で、いくつかの問題が生じていることになります。（中略）

これらの問題のほとんどは、別に日本人が日本語を話す外国人に敵意を持っているとか、意地悪をしているわけではありません。原因は、私たちが外国人との外国語によるコミュニケーション以上に日本語によるコミュニケーションに経験がなく、不慣れであるという状況にあります。しかし、何の悪意もないことは、その無邪気さゆえに、解決にはかえって多くの問題が横たわっています。

この状況を、たとえばアメリカにおける英語と比べてみましょう。

アメリカは移民が作った国家であり、今なお多くの移民を受け入れています。移民当初はさほど英語ができないのが普通ですから、普通のアメリカ人はスタンダードな米語ではない、日本人の耳には奇妙に響く英語に慣れています。それゆえ、そこで重要なのは、発音やイントネーションといった話し方の様態ではなく、何が話されているかという話の内容であり、アメリカ人は一般に英語が通じにくい相手にはゆっくり話したり、確認を取ったりすることに非常に我慢強く対応します。

ただし、母語話者の接触場面であれ、母語話者と非母語話者との接触場面であれ、原則としてそこで用いられる言語は英語です。中米・南米からの移民が増えた西海岸ではスペイン語が用いられることがありますが、それは米国全体ではあくまで特殊な状況です。言い換えれば、アメリカでは誰が来ようとも英語で対応することが標準であり、その軸だけはブレることがありません。そしてこれはアメリカに限ったことではなく、外国人が自分の国に来たときはその国で話されていることば、すなわち自分たちの母語で対応するというのは当然です。

外国人観光客に対する、いわゆる「おもてなし」をどう現実化するかは、さまざまな所で議論がなされていますが、言語の対応についても看過できません。ここで忘れてはならないのは「外国語でコミュニケーションを取ることは、巧拙にかかわらず旅のしみである」という視点です。たとえば日本人である私たちがロッコあたりに旅行をし、カタコトでもアラビア語で現地の人と話ができれば、用事が足せた感や異文化に触れた達成感などで、忘れられない思い出になるはずです。ということは、仮に来日した観光客が日本中どこへいっても自分の母語で案内され、説明され、供応されたら、それはこの人たちから旅の愉しみを奪ってしまうことになりかねません。それは②「おもてなし」の理念からは逸脱した、過剰な気遣いなのではないでしょうか。

社会学者であり、比較文化の著作も数多い氏は日本語国際センターの所長であったころ、当時そこで講師をしていた筆者に「日本人はソトの文化を取り入れて自分たちで改良することは大好きだが、ウチの文化を外国へ出すのは好きじゃないし、それが改良されることはもっと好きじゃない」と述べたことがあります。

確かに、思い当たるところはあります。家電品や自動車を改良して輸出するのは二〇世紀の日本のお家芸とすら言えるビジネスモデルでしたし、卑近な例で言えば南イタリアのナポリに行っても絶対にお目にかかれないスパゲティ・ナポリタンなどはそでしょう。一方でウチのものを変えられることを拒む例も、大相撲の力士を日本人に限ろうとか伝統的な和食の基準を作ろう、などという動きによく現れています。

日本語という日本文化の要素にも、その感覚は色濃く残っており、それが日本人の言語風土を構成しているのかも知れません。日本語を話す外国人を子ども扱いするのは、こんな精妙な言語を使えるはずがない、という思い込みであり、逆に厳しく直すのは、ソトの人によって日本語を間違って使われたくない、という表れだと考えられます。

しかし、文化はそれが良いものであれば、必ず世界中にし、人びとの日常を豊かに彩ります。そしてその過程で元の形が変わり、それぞれの人に使いやすく改良されるのは必然です。③日本文化や日本語だけは純粋な形を守ってくれないと困る、というのは説得力がありません。漢詩を返り点で読み、カタカナ語を貪欲に取り入れ、西洋文化をさんざん取り入れてきた日本にとっては、いまは日本文化や日本語をソトに向けて寛容に｢ひらく｣時が来たのです。

海外の寿司にパイナップルが乗り、外国で日本アニメの現地版が作られるように、日本語もまたもっと多くの人に学ばれ、使われることになるでしょう。グローバル化の本質とは誰もが英会話ができるようになることではなく、互いの文化を認め合い、その｢いいとこどり｣を認めるプロセスにほかなりません。

もっと多くの外国人が日本語を学べば、もっと頻繁に、わたしたちは｢奇妙な日本語｣を耳にする機会が多くなります。彼ら・彼女たちが口にする奇妙なアクセント、変わった造語、耳慣れない表現をいちいちめ立てしても、その変化を止めることはできません。たとえば日本人が大好きな本場のアメリカ英語だって、イギリス英語から分離して二〇〇年で出来上がったわけです。日本語が国際化する過程をおおらかに見守り、学んでもらい、使ってもらおうとするさこそ、今の日本人に最も求められている対応ではないでしょうか。

【グラフ資料は「新傾向問題編　グラフ資料」フォルダ参照】

語　注

モロッコ＝アフリカ大陸北西端の王国。主要言語はアラビア語。

嚆矢＝物事のはじめのこと。

問1　傍線部①「日本語母語話者と非母語話者との接触場面で、いくつかの問題が生じている」とある。これについて生徒たちが話し合っている次の会話文中の空欄Ｘにあてはまる言葉を漢字三字で書け。（10点）

Ａさん―　外国から来た人たちの日本語や、日本語を話そうとする思いを、私たちはしっかり受け止められていないのかな。

Ｂさん―　「外国人は日本語を話せない」「日本語では外国人とコミュニケーションできない」という　　Ｘ　　と向きあって、外国人との日本語でのやり取りを考え直してみる時が来ているんだね。

〔　　　　　　〕

問2　傍線部②「『おもてなし』の理念からは逸脱した、過剰な気遣い」とあるが、この具体例として最も適当なものを、次から選べ。（12点）

ア　銭湯に入る際、外国人がガイドブックを手がかりに日本語の注意事項を理解しようとしていたが、係員が外国人向けの英語で書かれた案内をすぐに手渡し、利用中常に手助けしていた。

イ　中国語の案内板を読んでいた外国人観光客が英語で話しかけてきたが、英語が理解できず日本語で対応したものの言葉が伝わらないため、メモ帳を出して漢字で書くように求めた。

ウ　豚肉由来成分の有無を確かめたい外国人が増えたため、店内に外国語での成分表示も掲げた上で、従業員に信仰による食事の相違を説明し、新たなメニュー案内を考案した。

エ　市場観光に来ていた外国人が魚の種類や漁の方法を日本語で尋ねてきたので、日本の漁法やり、人気の高い魚、取れたての魚を提供する有名店を日本語で紹介した。

〔　　〕

問3　傍線部③「日本文化や日本語だけは純粋な形を守ってくれないと困る、というのは説得力がありません」とあるが、ではどのようにすれば説得力が生み出されると考えられるか。三十字程度で説明せよ。（16点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問4　二重傍線部に関連した【資料①～④】を参照し、本文の内容と合致するものを次から一つ選べ。（12点）

ア　日本語学習者が年々増加傾向にあるのは、公的な機関における学習機会が増え、常勤の日本語教師も年々増加し、日本語学習者を日常的に支援する体制が整えられてきているからである。

イ　訪日外客数の急増を踏まえると、日本側の「おもてなし」風土はまだ追いついていないと考えられるため、外国語を中心とした案内板の増加や日本語教師養成が今後の鍵となる。

ウ　日本語学習者が減少していることから、日本語の魅力が世界に浸透しているとは言い難く、日本語学習の喜びや奥深さを訪日外客にも実感してもらえる手立てを考えていく必要がある。

エ　アジアからの訪日外客が多いことから、中国・韓国・台湾などを中心とした東アジア諸国の日本文化に対する関心の高さがうかがわれるが、それは日本語学習者数の増加とも関連付けて考えられる。

〔　　〕

【解答】

問1　先入観（先入見、先入主）

問2　ア

問3　日本語の国際化を受け入れ、外国人が日本語で話すこと自体を推進する。（33字）

問4　エ